

ヴェーバーの宗教社会学（3）

勝 又 正 直

7. 『儒教と道教』

この論文の雑誌掲載時の題名は『儒教』であった。ヴェーバーにとって儒教とは官僚精神の典型である。だから、この論文は、その儒教を批判することで、官僚精神を批判することをねらった論文だったのである。

儒教だけでなく道教を付け足したのは、正統と異端の両方をそろえるためである。これは、この後の論文で、ヒンドゥー教と（その異端であった）仏教ユダヤ教と（ユダヤ教の異端であった）キリスト教、を語るのに合わせたようにしたからと思われる。

この改訂増補版では、正統たる儒教だけでなく、異端たる道教も、呪術的世界を廃棄するどころか、助長し、呪術的世界そのものとなってしまったことを明らかにしている。

まずは中国史を外観しよう。

中国史年表 王朝名 年代 ポイント

- ◆王朝名：殷 前16-11世紀
 - ・神権政治 王の卜占（甲骨文字）人身供養 羌族を犠牲として捧げる
- ◆王朝名：周 西周 前11世紀-B.C.771
 - ・封建制（各地に王族・諸侯を配置して支配させる）
- ◆王朝名：周 東周 B.C.77-256
- ◆王朝名：春秋時代 B.C.770-476
 - ・都市発展時代 鉄器による飛躍的農業生産増大
 - ・孔子・墨子
- ◆王朝名：戦国時代 B.C.475-221
 - ・諸子百家
- ◆王朝名：秦 B.C.221-206
 - ・始皇帝 家産制（国家を皇帝の家産として支配する制度）の始まり
- ◆王朝名：前漢 B.C.202-A.D.8
 - ・儒教の官学化 儒教は体制を正当化するものであっても行政の指針とはならず
- ◆王朝名：新 A.D.8-23
 - ・儒教による政治革命 実践的原理をもたず失敗
- ◆王朝名：後漢 A.D.25-220
 - ・道教徒の一派である太平道による黄巾の乱184 華北・

- 華中の人口激減
- ◆王朝名：三国時代 A.D.220-280
 - ・北族（北夷）の流入
- ◆王朝名：晋 A.D.256-316
- ◆王朝名：五胡十六国 A.D.316-439
 - ・遊牧民族の中国北部への流入・占拠
- ◆王朝名：南北朝 A.D.439-589
- ◆王朝名：隋 A.D.581-618
 - ・新たな北族の勝利
 - ・選挙の制
- ◆王朝名：唐 A.D.618-907
 - ・科挙の制
- ◆王朝名：五代 A.D.907-960
- ◆王朝名：北宋 A.D.960-1127
 - ・王安石の改革1069-76
 - ・科挙制度完備
- ◆王朝名：南宋 A.D.1127-1279
 - ・士大夫 官僚=大地主=豪商の三位一体
 - ・朱子学の誕生
- ◆王朝名：元 A.D.1271-1368
 - ・塩引（えんいん）（専売の塩の引換券）と商税（間接税）による財政
 - ・紙幣の発行
 - ・ラマ教（チベット仏教）の王宮席卷
- ◆A.D.1351-66
 - ・紅巾の乱（終末論的宗教結社の白蓮教による反乱）
- ◆王朝名：明 A.D.1368-1644
 - ・漢人王朝
 - ・「海禁」朝貢外交への後戻り
 - ・宦官の暗躍
- ◆王朝名：清 A.D.1644-1912
 - ・女真族支配 科挙体制 A.D.1840-1842
- ◆A.D.1840-1842
 - ・アヘン戦争 A.D.1840-1842
- ◆A.D.1851-1864
 - ・太平天国の乱（キリスト教の影響を受けた拝上帝会による反乱）

- ◆王朝名：中華民国 A.D.1912-
- ◆王朝名：中華人民共和国 A.D.1947-

ヴェーバーの世界史認識で特徴的なのは、封建制と家産制の区別である。

封建制はヨーロッパのみに起きたと、ヴェーバーは考えている。これは、君主と騎士との間の自由な契約関係が社会を構成する中心的関係である。この関係のはざまに、誓約共同体としての自治都市が生まれ、ブルジョワジーと資本主義が生まれた。

それに対して、**家産制**国家では、国家は王や皇帝の家の財産の拡大とされ、自由な人格による契約はみられず、臣下は王や皇帝に隷属していた。

中国では科挙制度によって、皇帝と対抗する貴族や領主が育たず、皇帝権力におもねることで、官僚利権をもとめる士大夫たちがうまれた。

官僚は基本的にほとんど無給、あるいは薄給であった。通貨の不足・取引の手間が大きすぎるため、税金をいったん国庫に納めてから官僚の給料が払われるのではなく、現地で徴収した税を一部だけを中央に上納して残りを公然と着服するのが常であった。

また、官僚は3年ごとに任地を移動するので、現地のことには疎く、実際の現場の実務は地方の実務官僚（胥吏）しゅりが担った。

たてまえとしては、官僚は科挙制度によりあらゆる階層から拔擢され、皇帝の臣下とされた。実際には富裕な「士大夫」とよばれる、官僚と土地所有者と商人の三位一体の階級、が形成されていった。しかし皇帝に対抗する勢力とはならずあくまでも皇帝とその帝国に寄生する知識人＝有力者でしかなかった。

科挙制度で重視されたのは、専門知識ではなく、詩作と文章の巧みさと儒教知識の豊富さであった。

試験の席次は発表され、とくに「殿試」での席次（トップは「状元」）はその後の出世のコースを決めた。

こうした経済・政治状況にたいして、中国の宗教・思想は、適応するだけで何ら変えることはなかったのである。（現世適応）

個々の思想についてすこし触れておこう。

初期の**儒家**の思想は、人間関係調節的な教えの羅列で、宗教思想とはいえない。「鬼神を語らず」として、宗教的なことには言及しない。儒家はもともとは冠婚葬祭の集団であり、とりわけ葬式をとりおこなう「葬式屋」だった（白川1972）。

孔子は、冠婚葬祭の時の音楽の調和を人間関係にあてはめていったように思われる。その中心思想である、「仁」は、人が二人いることを意味し、人間関係のみご

とな調和、のこを意味する。また「礼」は、乱れのない人間関係の遂行を意味する。おそらく祭儀の破綻のない遂行から生まれた思想と思われる。

墨家は、防衛戦専門の戦争請負人集団（「工兵」）だったようだ。人格神としての「上帝」の下の平等を主張した。その開祖の墨子は、どうやら工具としての規矩準繩（きくじゅんじょう）からその思索をめぐらしていたようである。「規」はコンパス、「矩」は直角定規のことで、それぞれ円形と方形を作り出すための器具。「準」とは水準器、「繩」は下げ振り縄のことで、それぞれ水平と垂直を作り出すための器具。とくに「準」（水準器）から平等論を発想しているのではないかと思われる。

荘子と老子は、規則としての礼を重視する儒家を批判している。だから、儒家よりも後の思想家である。「道（タオ）」の原理を主張している。「道」とは、あらゆる現象に先立ち、その背後にあって、この世界を支配している原理である。

道教は、老子を開祖にいただいているが、もともとは老子とは関係ない、中国古来からある呪術的自然信仰を、仏教の影響のもとに、仏教との対抗意識から、体系化したもの。現世の御利益（ごりやく）、とりわけ不老不死をもとめる。**陰陽と五行**（木・火・土・金・水）による循環原理を作り上げた。

朱子学は南宋の**朱熹**が体系化した儒教思想である。道教の影響のもと、理（世界の形成原理）と気（世界の実質原理）の絡み合いから世界を説明している。

「理」は人間に内在して**性**となり、「**仁義礼知**」となって発現して国家・社会にひろがっていく、とした。また儒教の古典を「**四書五経**」として整理した。この四書五経は科挙試験の内容となって思想界を支配した。

世俗適応の官僚の精神である儒教は、現実的な合理主義であるが、呪術的な世界は放置した。結果それは「呪術の森」たる道教となって肥大化して、中国民衆の世界を支配している。「呪術からの解放」（脱呪術化）は、こうした官僚の表面的な現実適合の思想では遂行できない。むしろ宗教的な先鋭な思考による変革なくしては行われないのである。

8. 『ヒンデュー教と仏教』

現世適応の官僚の合理主義（儒教）では、呪術の園となった世俗を、改革することはできなかった。では現世を否定するような宗教ではどうなのだろうか。そこで私たちはもっとも世俗（日常世界）を否定するような諸宗教を生んだインドをみとめることにする。

インド史 年表と注

- 前2500-2000 ・インダス文明
- 前2000頃 ・アーリア人、パンジャブ地方（西北インド）に侵入。
- 前1000頃 ・リグ・ヴェーダ成立
- 前1000頃 ・アーリア人、ガンジス川流域に進出。
- 前1000頃 ・バラモン（僧侶）、クシャトリア（騎士）、ヴァイシャ（庶民）、シュードラ（隷属民）からなるヴァルナ制度、次第に確立。ヤジュル・ヴェーダ、サーマ・ヴェーダ、アタルバ・ヴェーダの編纂
- リグ・ヴェーダは、ホトリ祭官に所属。神々の讃歌。インド・イラン共通時代にまで遡る古い神話を収録。
- サーマ・ヴェーダは、ウダガトリ祭官に所属。リグ・ヴェーダに材を取る詠歌集。
- ヤジュル・ヴェーダは、アドヴァリユ祭官に所属。散文祭詞集。神々への呼びかけなど。
- アタルバ・ヴェーダは、ブラフマン祭官に所属。呪文集。他の三つに比べて成立が新しい。
- 前7-6世紀 ・初期ウパニシャド（ヴェーダの付随文献）成立
- 前7-6世紀 ・業・輪廻（カルマ）の教説、宇宙原理ブラフマンと個体原理アートマンの合一（梵我一如）説
- 前5-4世紀 ・〈都市発展時代〉「古クシャトリア」時代
- 前5-4世紀 ・ジャイナ教・仏教、成立
- 前321頃 ・マウリア朝（前187頃）インド統一
- 前321頃 ・カウティリヤ『実利論』
- 前321頃 ・アショーカ王（前268-232）、仏教保護
- 前220-後236 ・アーンドラ（サータヴァーハナ）朝中南インド
- 前220-後236 ・バラモン教を保護
- 前220-後236 ・ナガールジュナ
- ナガールジュナ（龍樹）は、インドの代表的仏教思想家。「般若経」の「空」を継承発展させ、大乘仏教の根本思想として理論づけ、大乘仏教での最初の学派、中観（ちゅうがん）派の祖とされる。
- 空（くう）とは、世界には現象はあるが実体はない、とする仏教の基本的でもっとも重要な概念。
- 後45-250 ・クシャーナ朝 北インド
- 後45-250 ・カニシカ王の仏教保護

- 後1世紀 ・「バガヴァット・ギーター」最終成立（原型は前1世紀）。
- 後1世紀 ・マヌ法典（インドの伝統的社会規範を説く聖典）（前2-後2世紀）
- 250-320 ・分裂時代
- 320-520 ・グプタ朝、インド統一 バラモン文化復興
- 6-10世紀 ・ラージプート（戦士）時代（分裂時代）〈中世〉
- 700-750頃 ・シャンカラ、ヴェーダンタ哲学の発展

シャンカラは、8世紀のインド宗教哲学者。彼の「不二一元論」は、宇宙の根本原理であるブラフマンと自己の中にあるアートマンは同一であり、したがってアートマンはブラフマンと同様、不変常住、常住解脱者、無欲、不老であるとする。しかし現実の人間はうつろいやすい個別的で物質的な世界しかとらえることができず、輪廻にくるしんでいる。シャンカラは、それは人間が無知（アビドヤ）のために、現象世界がじつは幻影のように実在しないものであり、ブラフマンとアートマンが不二であることに気づかないからである。この無知を滅することによって輪廻からの解脱が可能となるのだと説いた。

- 11世紀 ・イスラム教徒の侵入〈近世〉
- 11-12世紀 ・セーナ朝
- 11-12世紀 ・仏教、インドで消滅。
- 1206-1526 ・デーリー諸王朝時代
- 13-14世紀 ・北インドのムスリム諸王朝
- 13-14世紀 ・デカンの諸王朝
- 13-14世紀 ・南の半島南端の仏教の諸王朝
- 14世紀 ・北インドのムスリム諸王朝
- 14世紀 ・デカンのムスリムのバフマニー朝
- 14世紀 ・南部のヒンデューのビジャヤナガル朝
- 1526 ・ムガル帝国、成立
- 1707 ・ムガル帝国衰退。
- 1707 ・継承国家と分立国家（マラータ同盟、シーク教徒など）

シーク教とは、ヒンデュー教とイスラム教が融合した宗教

- 1856 ・ブラッシーの戦い イギリス、ベンガル徴税権を得る〈近代〉
- 1857-1859 ・セポイの反乱
- 1858-1947 ・インド帝国 イギリス、インドを直接支配。

カースト制とは、バルナ制とジャーティ制の2つを総称したものである。

バルナは、人間を「再生族」と「一生族」に分ける。

再生族(ドヴィジャ)は、一定の年齢に達すると師について入門式(ウパナヤナ)を受け、聖なる紐(ひも)を受ける。これを「第二の誕生」とみなすので、「再生族」とよばれる。再生族は、バラモン(祭司)、クシャトリア(騎士)、バイシャ(庶民)に分かれる。

一生族(エーカジャ)は、シュードラ(隷属民)。さらにこの下に、不可触賤民がいる。

ちなみに、再生族のヒンドゥー男子に適応される古代インドにおいて成立した理想的人生区分として、つぎのようなヒンドゥーの4住期(ヴァルナーナスラマ・ダルマ)がある。

- | | |
|------------------|--------------|
| (1)学生期(ブラフマチャルヤ) | ヴェーダ学習 |
| (2)家住期(ブラフマチャルヤ) | 家庭人として勤めを果たす |
| (3)林住期(ヴァーナプラスタ) | 引退して林の中に隠居する |
| (4)遊行期(サンニャーサ) | 聖地に巡礼して死を迎える |

ジャーティはバルナよりもさらに細分化されており、ほとんど職能ごとに別のジャーティとされる。その特徴は、内婚(同じジャーティ内部で通婚する)、水のやり取り・食事を共にすること(他の者から受け取ったり、ともに食べるのは不浄とさいて忌避される)、職業の継承すること、である。ジャーティは男系で継承される。

またインドの前近代性を示す慣行としてしばしばとりあげられるのは、「寡婦殉死」(サティー)である。これは、夫に先立たれた妻が、夫の火葬の日自らも飛び込んで自殺を図る行為である。ヒンドゥー教の古い慣習にさかのぼる。ヒンドゥー教によってこうした行為も正当化され温存されてきたのである。

ヴェーバーは、「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」の記述の時に、伝統主義的経済に対しては伝統主義、資本主義に対して資本主義の精神が対応していると考えたのと同じように、カースト制に対してはそれを維持させた精神としてヒンドゥー教を考えている。

ヴェーバーの見るところ、バラモン教の異端として生まれたジャイナ教と仏教は現世から逃避するばかりで現世を変革せず、バラモン教から生まれたヒンドゥー教が現世に適合し、現世のカースト制を正当化して温存するものとなった。

こうした現世適応、現世維持のイデオロギーとしてのヒンドゥー教について述べた後、ヴェーバーは、インド

宗教の内的な発展を探ろうとする。

ここで興味深いのは、インド宗教思想の発展の契機をクシャトリアに思想的優位をおびやかされたバラモンたちが、その優位を取り戻すべく思想を展開したと見ていることである。一部の文献に見え隠れするように、クシャトリアの哲学的思惟はバラモンのそれをしのぐようになっていた。みずからの宗教的権威を脅かされそうになったバラモンたちは、自分たちの呪術的な力を正当化しすべく思索を展開し、こうしてウパニシャッド哲学が発展してきた。

バラモンは、もともとの祭司から、ヴェーダ文献へのアタルヴァ・ヴェーダの参入にみられるように、呪文をつかう呪術師へと変化してきた。呪術師であるフラフマン祭司が実権を握るに至ったのである。

さてこの呪術師たるバラモンは、次のような自問自答をした。

「なぜ私が唱える呪文が威力を持つのか。」

バラモンは、それは私(アートマン)が宇宙の原理(ブラーフマン)と同じもの、一体だからではないのか、と考えた。ウパニシャッドの文献では、そのことを、「汝はそれである」という言葉で表現している。

こうして呪術師が呪術によって世界を動かすのは、呪術師の自我が世界の原理と一体のものだからだという考えが生まれた。これをふつう「梵我一如」という。

さらにヴェーダ哲学が確立した思想に「輪廻転生説」がある。霊魂輪廻(サンサーラ)とは、霊魂は絶えず生まれ変わっていくことであり、この霊魂は前世の報いを現世で受け、現世の罪は来世で受けるとされる。これを「業」(カルマン)の教説と呼ぶ。具体的には、前世で善行を積み、人間や神にまでなれるが、罪を犯せば、次の生では獣や虫けらなどに生まれ変わる。カーストの上下の差別も、この教説で正当化される。この教説はバラモン教だけでなく、インド思想全般の基本前提となっている。この業による輪廻転生への巻き込まれから離脱することが、インド宗教思想において追求される救済なのである。

バラモン教では、梵我一如の考えからの当然の帰結として、ブラーフマンとの我(アートマン)との合一によって輪廻の輪から離脱できるとした。そこでは、呪術師になるための修行(苦行)が、輪廻からの救済の修行へと発展していった。

ウパニシャッド文献にすでにみられたように、クシャトリアの宗教的思索がバラモンたちの思索を脅かし始めていた。それに対抗して、バラモンたちは自分たちの正当化のために教えを発展させた。しかし、それがかえって現世から逃避する(輪廻から離脱する)方向を示すこととなり、自分たちの敵対者である異端(ジャイナ教や

仏教など)を盛んにさせることになってしまったのである。

9. 『ヒンドゥー教と仏教』(2)

紀元前4-5世紀、鉄器の犁の使用により農業生産は飛躍的に拡大し、世界の諸文明において、「都市発展時代」となった。この時代さまざまな思想が展開した。中国における諸子百家時代もこの時代である。インドでも同じころ、さまざまな思想が花開き、とりわけ世俗逃避的知識人による異端宗教が展開されることになった。

まず、ウパニシャッド哲学の一派である**サーンキヤ学派**は、男性的精神原理(プルシャ=アートマン)は女性的原理の原物質(プラクリティ)と結合することによって輪廻に巻き込まれており、知恵をえることで、そこから離脱(解脱)できると説いた。

ジャイナ教は、苦行によって古い業をなくし新しい業が自我に付着するのを防ぐことで、輪廻から離脱しようとした。ジャイナ教徒は業の付着を防ぐために、「**五誓戒**」という5つの戒めを誓う。すなわち、生き物を殺すこと、嘘をつくこと、盗むこと、男女のよこしまな行為、ものを所有すること、の禁止である。またまちがって虫などを飲み込んで殺してしまわないように、つねにマスクをしているため、ふつうの生産活動ができず、もっぱら商業に従事するようになった。

また、一切の衣服をまとわない「空衣派」と、染料をつかわない白衣だけはみにまとうことをみとめる「白衣派」に分裂した。結果、一般世界への影響力は限定されたものとなった。

仏教では苦行は否定され、瞑想が重視された。強固に安定した自我というものは否定され、人間とはいろいろな要素が集まっただけのものとされた。輪廻ばかりでなく、あらゆるものが変化してとどまることがないという。その教えの基本が「**四諦八正道**」である。

四諦とは、つぎの4つの悟りである。

苦諦：生きることは苦である

集諦：苦の原因は煩惱である

滅諦：煩惱を消すことで苦が滅する、すなわち涅槃(ニルヴァーナ)にいたる。

道諦：煩惱をなくし悟りを開くための8つの道(すなわち八正道)

八正道とは、正見、正思惟、正語、正業、正命(生活)、正精進、正念(自覚)、正定(瞑想)から成る。

初期の仏教はきわめて個人主義的な修行僧の宗教であった。初期の仏教を「**部派仏教**」とよぶ。これは世俗否定かつ世俗逃避的宗教であった。

紀元前3世紀～後3世紀にかけて、こうした修行僧と

はべつに、ブッダの遺骨を収めた仏塔(ストゥーパ)を崇拝する一般信者から「**大乘仏教**」の運動が生まれた。

大乘仏教では、仏の複数化する。また仏となる(涅槃にいたる)手前であえてこの世にとどまり大衆を救う存在として「**菩薩**」の考えが生まれた。また人間はだれでも仏になる性格をもっているとして、「**如来蔵**」(仏性)が提唱された。

さらに、開祖ブッタの言葉によらない膨大な仏典が出現した。「浄土三部経」、「法華経」、「般若経」、「維摩経」、「涅槃経」、「勝鬘経(しょうまんぎょう)」など。

また自我ばかりかあらゆる物質が相関的であって絶対で安定したものではないという「**空**」の思想が提唱されるようになった。

6-7世紀になると、さらにインドの呪術的信仰が積極的導入され、「**密教**」が生まれた。**マントラ**(真言)(呪力のある言葉、バラモン教のダラニ)や**印契**(いんげい)(呪力をもたらす手を結ぶ形)や**ホーマ**(護摩)(煩惱を焼きつくす火)や**タントラ**(シャクティ(性力)崇拝)などが導入された。

また宇宙の根本神として、「**大日如来**」が中心にえられた宇宙の表象・神々の配置(パンテオン)である「**マンダラ**」がうまれた。マンダラには、智の世界としての「**金剛界**」と、理の世界としての「**胎蔵界**」がある。

中心となる教典の「**大日経**」と「**金剛頂経**」は日本にもチベットにも伝播しましたが、「**秘密集会タントラ**」はチベットのみ伝播してチベット仏教の中心仏典となった。

バラモン教はヒンドゥー教として復興した。基本神は、**ブラスマー**(世界創造神)、**ヴィシュヌ**(世界維持神)、**シヴァ**(破壊神)。多くの信者は、ヴィシュヌ派とシヴァ派に分かれる。神への熱烈な信仰(親愛バクティ)が重視されるようになった。またリンガ(男根)崇拝も盛んで、リンガに付随するピータ(台座)は、ヨーニ(女性性器)を意味している。

10. 『古代ユダヤ教』

仏教はインドにおいてタントラの影響をうけて密教となり、インド大衆の呪術的な密儀のなかに溶けていってしまった。現世逃避的な知的宗教である仏教は、現世に向かう時、それと適合(迎合)することになり、その呪術の絡み合った密林のような園を切り開くどころか、そのなかに埋没した。インドで途絶えた密教はチベットに伝わり、遊牧民たる吐蕃の気高さのなかで命を与えられ、現代まで生き続けることになった。

他方、インド大衆は、変幻自在に生まれ変わり顕現するヴィシュヌ神とシバ神への強烈な信仰(バクティ)を、

性交を奉るリング崇拝に織り交ぜつつ、ヒンドゥー教を復興させることになった。大衆の呪術的・性的信仰は、否定されることなく、現在まで続いてきた。

さて、役人根性（官僚の精神）たる儒教は、世俗を軽蔑しつつ結局はそれに迎合するしかなかった、知的修行僧の宗教たる仏教は、世俗から逃避したために世俗を変えることがなかった。また世俗大衆を救う宗教として生まれ変わった大乘仏教も、さらに性的密儀をとり入れた密教も、結局、世俗に迎合し飲み込まれ、呪術にそまった世俗大衆を変えていくことはなかった。

こうした世俗迎合（適合）的な宗教とはちがい、今ある現状（世俗の状況）を厳しく否定しつつ、それを支配し変えていった宗教として、私たちは古代ユダヤの宗教を取り上げることにしよう。

ユダヤ民族は、古代において、周辺の弱小民族でしかなかった。にもかかわらず、それは消滅することもなく現在まで確固と存続している。いやそればかりか、その弱小民族の信奉する神（YHWH）は、世界3大宗教のうちの2つ、キリスト教の神、イスラームの神となり、今なお、世界の多くの民を支配している。

このパラドックス（逆説）はいかにして生まれたのか。『古代ユダヤ教』という論文は、この謎を解明しようとする論文にほかならない。

地政学上の位置

イスラエルの民が暮らしたカナン之地というのは、メソポタミアとエジプトの両大帝国内に挟まれた地域であり、そのためつねに双方から侵略され支配される運命にあった。

カナンの地理

イスラエルの内部は、北の肥沃は農耕地と、南の荒涼たる砂漠とステップ、とに二分される。北には農民が住み、南には家畜飼育者（牧羊者）が定住した。

古代の国家の発展方向

ヴェーバーは古代において国家の発展には次のような2系列があったと考えていた（『古代農業事情』）。

- (1)ギリシャ・ローマ型発展系列：城砦王制から民主的ポリスの形成に向かう。
- (2)オリエント型の発展系列：城砦王制から君主政国家へと発展していく。

古代における階級対立

都市貴族が交易によって得た貨幣を農民に貸し、その結果、農民が都市貴族の債務奴隷に転落する。この都市貴族vs.債務奴隷（農民）が古代の階級対立である。

- (1)の場合は、一般市民が自分武装することで、政治的権利を得て民主化した。奴隷は征服地から補給され

る。

- (2)の場合は、官僚制をもった絶対的な王制（帝国）が生まれて、王は国家を自分の家として支配し、人民全体が王の家僕（奴隷）となる。旧約聖書のなかで、「エジプトの家」と言う時には、地理的な「エジプト」ではなくて、人民が奴隷状態にあること、を指している。

イスラエルは、(1)と(2)の発展方向のはざまにあって、両方への発展の方向が働き、その葛藤と矛盾がイスラエルの独自の発展をもたらすことになった。

イスラエル年表（Metzger1963訳書参照）

- 前19-17世紀 <族長時代>
- 前13世紀 <モーゼ時代>
- 前13世紀後半
 - ・イスラエル諸民族カナン侵入・定着（？）
 - 「契約の書」
- 前12-11世紀 <士師時代>部族連合、戦時における大士師の指導
 - ・「デボラの歌」ペリシテ人（鉄器を持った海の民）の東進、シロの神殿を破壊
 - ・契約の箱
- <王国時代> サウル、王権樹立
- 前1000頃
 - ・ダビデ即位 エルサレムへ遷都
- 前961
 - ・ソロモン即位 王宮・神殿の建設
 - ・「ヤハウィスト」(J)
- 前926
 - ・王国分裂
- <南北分裂王国時代>
- 前900頃（北王国）
 - ・ヤラベアム I 世、ベテルとダンに金の牛の像を起し、聖所とする。オムリ王、サマリアに遷都。
 - ・カナン宗教蔓延 預言者エリア
- 前850頃（北王国）
 - ・「エロヒスト」(H)
 - ・王母アタリアの独裁と死
 - ・預言者エリシャ
- 前845（北王国）
 - ・エヒウ革命（預言者エリヤとエリシャに指導された抵抗運動の指導下に、エヒウが〈ヤハウエ主義革命〉を起こし、オムリ家を打倒）
- 前840（南(ユダ)王国）・祭司による宗教粛正
- 前800（両王国）
 - ・両王国の繁栄と社会的退廃
- （北王国）
 - ・ヤラベアム II 世
 - ・預言者アモスとホセア
- 前733（両王国）
 - ・シリア・エフライム戦争
- （南(ユダ)王国）・アッシリアに従属
- （北王国）
 - ・反アッシリア同盟に属する
- 前721（北王国）
 - ・アッシリア軍によりサマリア陥

落。北王国の崩壊（上層民の流刑）と異民族の移住

<単一王国時代>

- 前721
 - ・ヒゼキア王 宗教肅正 アッシリアへの反乱
 - ・アッシリア軍、エルサレム包囲 アッシリアへの従属
 - ・預言者イザヤ（後期）「エホウィスト」（J+H）
 - ・アッシリアの衰退 ユダ王国の一時的独立
 - ・ヨシア王（前640-609）申命記改革 ヤハウエ原理主義
- 前609
 - ・エルサレム礼拝独占、「申命記」文書（D）成立
 - ・メギドの戦い ヨシア王の死
 - ・預言者エレミア（前期）

<エジプトの支配>

- 新バビロニアの支配
預言者エレミア（後期）
- 前597
 - ・新バビロニア王ネブカドネザルの軍、エルサレム包囲
 - ・第一次捕囚（上層民をバビロンに連行）
 - 前578
 - ・新バビロニア軍によりエルサレム陥落、神殿崩壊
 - ・第二次捕囚 預言者エゼキエル

<捕囚時代>

- 捕囚地バビロンで「神聖法典」（レビ記17-26章）
「祭司文書」（P）成立 預言者第二イザヤ
- 前539
 - ・ペルシャ軍によりバビロン陥落

<ペルシャ時代>

- 前538
 - ・ペルシャ皇帝キュロス二世の勅令により第一次帰還
- 前515
 - ・サマリア人の援助を断り、その妨害に耐えて神殿を再建。
- 前458
 - ・ネヘミア、ユダヤ州の知事として着任。城壁再建、社会改革。
- 前430
 - ・エズラの宗教改革進展。
 - ・エルサレム神聖共同体を確立。大祭司・長老組織による行政
 - ・「モーゼ五書」（創世記・出エジプト記・レビ記・民数記・申命記）成立。
- 前331
 - ・アレクサンダー大王によりペルシャ滅亡

ヴェーバーが取り入れた諸学説

「古代ユダヤ教」をヴェーバーが書いた時はちょうど現在の旧約学の基礎が築かれた時期にあたる。彼が採用し現在でも有効とされている旧約学の説は次の2つである。

4 資料仮説（ユリウス・ヴェルハウゼン提唱）

旧約聖書の律法（トーラー）、すなわち「モーゼ五書」（創世記・出エジプト記・レビ記・民数記・申命記）は、おもに4つの文書から成り立っている。

文書名（略号） 成立期・成立場所 特徴など（JEはJとEの結合）

- ・ヤハウィスト（J） 前10世紀統一王朝時代のユダ
神名「ヤハウエ」を使用
- ・エロヒスト（E） 前9世紀分裂時代の北王国神名
神名「エロヒム」を使用
- ・申命記（D） 前7世紀北王国崩壊後のユダ
捕囚期に増補改訂
- ・祭司文書（P） 前6世紀バビロニア
祭司が作成
- ・エホウスト（JE） 北王国崩壊後のユダ
JとEを結合

生の座（Sitz im Leben）（ヘルマン・グンケル提唱）

編集された文書には、以前からのさまざまな伝承（法律集をふくむ）が含まれている。文章の様式から、そうした伝承がおこなわれた場（生の座）を探らなくてはならない。

類感的性的狂騒道

また、すでにみたように、フレイザーの『金枝篇』の類感呪術の概念から、「共感的性的狂騒道」という概念を作り上げている。これは類感呪術の思考がもたらす、多産を願っての性的な狂騒道が、農耕民において繰り返されるというものである。北王国に頻繁にみられた金の牛の崇拝やバール神への崇拝は、まさにこの「共感的性的狂騒道」であったとヴェーバーはみていた。

社会対立の構造

ヴェーバーによれば、イスラエルでの王権以前の社会構成は、農民・土地所有の氏族（ヤハウエの名のもとに集う連合軍の担い手）と、牧羊者の氏族（ヤハウエ連合軍の担い手）と、客人氏族（手工業者・楽人など）、とから成った。それが、王権成立後の社会構成は、都市居住地主貴族（軍事的担い手）と「都市デーモス」、すなわち、かつてのイスラエル誓約連合の中核だった農民や牧羊者が非軍事化・無産化して生まれた人びとと、客人氏族が改宗した寄留者、という構成に変化した。王制の成立によってイスラエル内部に階級対立が生まれたの

である。

イスラエル内部の階級対立

イスラエル誓約連合は、ヤハウエの名の下に、カナン
の都市貴族への反乱解放の軍事同盟として生まれた。も
ともとヤハウエは、誓約連合のためにモーゼからイスラ
エルの民が受け入れ契約を結んだ戦争神であった。都市
貴族への隷属は、エジプトの王制の下の屈従、にたとえ
られた。だからそこからの解放は、「エジプトの家」から
の解放にたとえられ、モーゼの「エジプト脱出」（出
エジプト記）の記憶は、誓約連合の人民全体の記憶とな
ったのである。

にもかかわらず、王制が生まれると、今度は都にいる
王と貴族が、かつての都市貴族と同じく、民衆を搾取し
債務奴隷にしようとする。イスラエル内部には、解放の
ための連合から生まれた王制が大衆に隷属をもたらして
いることへの不満と批判がたえず渦巻いていたのである。

ユダヤ教発展

こうした階級対立からユダヤ教は展開され、それが国際
政治の説明とされることで、一神教への変容が生まれ
る。これをさらに詳しく見てみよう。

ユダヤ教発展の担い手は、祭司・知識人・預言者であ
った。

祭司

神殿祭司とはちがい、一般大衆を相手にしていた「レ
ビ人祭司」こそ、ユダヤ教発展の担い手であった。かれ
らレビ人祭司は、大衆相手の宗教的カウンセリング（魂
のみとり）で、次のような質問を受けた。

「どうしてこんな苦しい目にあうのでしょうか？」

これに対してレビ人祭司はこのように答えた。

「あなたはものを盗んだりしませんでしたか？」

この質問を肯定形にすると「あなたは盗んではならな
い」という戒律になる。

レビ人のもとに来たのは都市貴族によって債務奴隷に
されたりしている都市無産階級や地方の搾取されている
農民たちであった。彼らの質問に答えるにつれて、レビ
人の宗教の内容は、もともとは誓約同盟の同胞であった
民衆を無産化させ隷属させている王制への批判と、も
ともとの解放の同盟であったイスラエルへと立ち返るべ
きだ、という内容になっていったのである。

つまり、ヴェーバーは、律法の生まれた「生の座」を、
レビ人の宗教的カウンセリングにみたのである。

知識人

ユダヤの知識人は、バビロニアやエジプトの神話を脱
色して多くの神を削り、循環する時間感から直線的な時
間を導き出して、ユダヤ教を一神教として精練してい
った。

たとえば、「ティアマート」という（海水の）原母神

の殺害から世界が創造されるネスマ・エリシュ神話を換
骨奪胎して、創世記の世界創造神話をつくりあげた。そ
の際、ティアマートは「海」と書き換えられている。

しかし、多神教の世界から一神教の世界へと神話を書
き換え、ユダヤ教の純化と体系化をはかるには、その前
提として、ヤハウエ神の絶対性が確立していなくては
いけません。そのヤハウエの絶対性を確立したのが、
預言者である。

預言者

預言者たちは、神からの言葉を民衆に告げることで、
ヤハウエの絶対性を確立した。

預言者とは予言者とはちがう。預言者とは神と民衆
をつなぐ仲介者をいう。神の言葉を預かり民衆に伝える、
だから預言者は「主はこう言われる」と言う。当時、主
人の言葉を預かった僕（しもべ）は、相手方に到着する
と「私の主人はこう言った」と語り始めて、自分の主人
の言葉をそのままオウム返した。その習慣を預言者と神
との間に適応したのである。つまり預言は、将来の予告
よりも、神の言葉の宣布にあった（雨宮2009, p.180）。

ユダヤの預言者は、敵の帝国による北王国とユダヤの
滅亡を、ヤハウエが敵国を操作してくださった、イスラ
エルへの罰だと解釈した。それまでの解釈は、民族の敗北＝
国の神の敗北であった。しかし、預言者の解釈は、ユダ
ヤ民族の敗北＝背信のユダヤ民族にたいするヤハウエの
罰、であった。ここに、ヤハウエは敵の帝国軍をも操れ
る絶対的な神へと昇格する。この卓抜した解釈と宣告に
よって、ヤハウエは絶対の世界神となり、その絶対神の
与えた命令（律法）を守るユダヤ民族には必ず救済があ
るはずだという強烈な信仰がうまれたのである。

その際、イスラエルが犯した罪として挙げられたのは、
ヤハウエ以外の神への崇拝へと、同胞を債務奴隷として
隷属させた罪である。

イスラエルには、北と南の対立と、都市の貴族と（債
務奴隷としての）農民・定住した牧羊者との対立があっ
た。

農耕地が多い北では、農耕の多産を祈願するバールな
どにたいする信仰と祭儀が盛んであった。北王国の預
言者はこのヤハウエ以外の偶像崇拝による祭儀を激しく弾
劾し、それが北王国滅亡の原因だったとした。

南のユダ王国の預言者は、さらにエルサレムの神殿の
崩壊さえ預言するに至った。同胞を搾取隷属する驕慢な
王国に対して、ヤハウエはアッシリアや新バビロニアを
もあやつって罰を与える。ユダヤが崩壊したのは、エ
ジプトやアッシリアや新バビロニアの神が、ユダヤの神ヤ
ハウエより強かったからではない、ヤハウエがエジプト
やアッシリアや新バビロニアのような世界帝国までも、
あやつるような唯一絶対の神だから、なのである。

こうした、祭司・知識人・預言者の三つどもえの働きによって、ユダヤ教は一神教へと純化・体系化され、捕囚後ユダヤはその信仰による神政政体となった。

ユダヤの崩壊と捕囚というもっとも宗教的な危機でもありえた事件が、逆にヤハウェの信仰を強靱なものにし、それを一神教として確立させた。まさにこの逆説こそ、西洋社会とイスラム世界を支配する一神教をもたらした逆説なのである。

預言者の2類型

ヴェーバーの預言者類型では、「模範預言」と「使命預言」が有名である。模範預言は信徒に自らが手本となってみせるような預言者あり、ブダなどがその例である。使命預言とは信徒に神の命令を伝える預言者である。古代ユダヤの預言者がまさにそれにあたる。

「古代ユダヤ教」では、ヴェーバーは預言者を、イメージを幻視する視覚的な預言と、神の声を聞く聴覚的な預言とに分けている。

視覚的預言は、集団的な狂騒と関連があるとヴェーバーはみなしている。それはちょうど、ニーチェが『悲劇の誕生』で、コロスの音楽によるディオニソスの原理と彫刻的なアポロの原理が、ギリシャ悲劇のなかで交互に現れると説いているのと照応する。視覚的預言は音楽にひたりながら幻影を見る満ち足りた至福の状態をもたらす。それにたいして、聴覚的預言はあくまでも預言者を突き動かして止まない。それは人を突き動かし続ける命令の預言なのである。聴覚預言は、セム族の宗教にみられる特徴と思われる。この聴覚的預言者の系譜の最後にある者として、イスラム教の開祖マホメットが登場するのである。

まとめ

カントの『純粹理性批判』において、「純粹な理性」は左頁では「神はいる」と言い、右頁では「神はいない」という。「純粹な理性」というものが、こうした自己分裂、いわば「狂気」におちいつていることを、カントはこの『純粹理性批判』のなかで描いた。

理づめだけで考えていくと、神の存在さえどうにでも言える、つまり無根拠なものになってしまう。それが私たち近代人のおかれた精神的状況である。あらゆる道徳倫理の根拠だった神が空位となった時代。それが現代である。

「人を殺して何が悪いのですか」という子どもの問いかけに絶句してしまう識者を、もはや誰も笑うことはできない。

かつて「神はいる」と信じた人たちがおり、その人たちはこの世界をたしかに変えてきた。しかし、世界はどう変わったのか。人を殺してはいけない、その理由をはっ

きりと言うことができない、そうした世界に変わったのである。

宗教が宗教の欠落した世界を生んでしまった、この恐るべき逆説（パラドックス）。この逆説的發展の帰結としての近代社会において、それでもなお、もはや唱えるべき神の名を持たないにもかかわらず、ひとびとに訴えようともがく人間、そういう人間として私たちはマックス・ヴェーバーをとらえたい。

宗教と世俗の世界との逆説的な関係は、彼の最初の宗教社会学的論文「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」において、すでに明らかである。

教皇庁が発行している贖宥状を批判することで宗教改革をはじめることになったマルチン・ルターがその職業概念（職業のとらえかた）において、宗教者の仕事（聖職）ばかりか、いっばんの仕事まで、聖職と同じ「ベルフ」（Beruf）（神から与えられた使命）だととらえようとしたことで、一般の仕事、とくに営利活動（金もうけ）も、けっしていやしい仕事ではないのだとされた。

ジュネーブで厳格な宗教政治をおこなったカルヴァンは人間は救いに予定されている者と滅びに予定されている者に分けられるとした。カルヴァン派の人々は、その仕事の成果、具体的には、その営業成果（もうけ）が多ければ多いほど、自分は救われる予定にある、と思いこみ、そうした「救いの証し」を求めて、金儲けの仕事や神からの使命だともって一生懸命にするようになった。あるいは、雇われ仕事を使命だと思ってまじめに働くようになった。そうして営利活動をする資本家と労働者が生まれ、資本主義が成立した。

しかしいったんこの資本主義が生まれると、こんどはそれ以外の生活態度は許されなくなる。私たちは信仰のためではなく、社会から脱落しないために、必死になって働くしかない。

硬直したシステムが支配する現代にあってそのシステムを打ち壊し刷新していくにはどうしたらいいのか。そうした革新と刷新をおこなえる人間はどのような思想を持っているのか。

ヴェーバーはそうした人間像を過去の宗教のなかに探る。それがかれの『宗教社会学論集』である。この書はヴェーバーの模索の書、いわばこれは「精神の遍歴」なのである。

硬直したシステムとしてヴェーバーが問題視したもののひとつが官僚制である。

官僚の精神を体現しているのが、孔子を開祖とする儒教である。冠婚葬祭の業者だった孔子とその弟子によるこの思想は、つつがなく破綻なく祭り事がおこなわれることを目的としており、そうしたうわべの端正さ（礼）に至上の価値をおく。

中国歴代王朝が採用した人材登用試験（科挙）の試験内容にこの儒教が採用されることで、この儒教は中国の政治・知識エリートの哲学となった。

しかし、一般の人びとは、まじない（呪術）を信じていた。

フレイザーによれば呪術には2つある。ひとつは、似た動作や、似たものに加えた行為は同じ効果をもたらすという原理にもとづく、類感呪術である。もうひとつは、いちど触れあったものや、体の一部は、本体と離れたのちも、本体に影響を及ぼすという原理にもとづく、感染呪術である。

宗教は神に懇願・崇拜するのに対して、呪術は神的な力に操ろうとする。

中国では呪術や占いは道教としてまとめられた。儒教はそうしたまじないなどを軽蔑しながらも改めることはなかった。この役人根性の哲学は世俗に適合することはできても世俗を変えることはできなかったである。もちろん、そうした精神風土のなかでは資本主義は生まれることはなかった。

ではそうした世俗世界を否定するような宗教思想はなかったのか。

ヴェーバーはそれをインドの宗教思想にみる。

インド古来のブラスマン教（バラモン教）では、人間の靈魂は、業の輪廻（めぐり）によって永遠に生まれ変わるとされる。生き物は前世におかした罪（業）を引き継ぎ現世に生まれ変わり、現世に犯した罪を、来世に生まれ変わって背負う。こうして因果応報をうけつつ転生を重ねていく。

この輪廻転生からの離脱こそ、インドの宗教思想がめざしたものだった。

ブッダは、こうした輪廻転生をとげていく人生そのものが苦にほかならないとした。これが「一切皆苦」の教えである。そのことを知って正しく実践することで、この苦の連鎖から離脱する、すなわち涅槃にいたるのだとした。

しかしブッダの教えは現実世界から離脱していく修行僧の宗教であった。

それにたいしてブッダの骨をおさめた仏塔を礼拝する在家信者たちからうまれたのが大乘仏教であった。大乘仏教は、現実世界から逃避することができない一般の人びとはどうすれば救われるのかという問題にこたえようとした。仏となるために修行している人で、人びとを救うために力をつくす人を菩薩と呼ぶ。大乘仏教では菩薩はブッダだけではなく、たくさんおり、人びとを救う。つまり、菩薩とは、大衆を救うためにあえて仏となって涅槃に行けるのを思いとどまっている、一種の救世主なのである。

この菩薩の考え方を全面的にだすことで仏教は大衆救済宗教となった。

さらに仏教は呪術や民間信仰をとりいれインドのあった性力（シャクティ）の秘儀をとり入れることで密教となった。しかし、その結果、一般大衆の性的・呪術的な信仰のなかに飲み込まれてしまった。

この後期密教は、唯一、チベットに伝来することで、人間の心身と清濁のすべてをとらえるチベット密教として現在まで生き残った。

世俗否定的でかつ世俗から離脱しようとした仏教は、結局、一般世界を変えることはできず、それに向きあうとそれに迎合（適合）するしかなかったのである。

もともとのインドの宗教であったバラモン教は、仏教やジャイナ教などの異端を生み出した後、ヒンドゥー教として復興した。

ヒンドゥー教の神はブラーフマ神、ヴィシュヌ神、シヴァ神の3つである。とりわけ、ヴィシュヌ神とシヴァ神が信仰された。

ヒンドゥー教では、行為の成果を思わず、義務ダルマをたんたんとおこなうことで、輪廻の輪にまきこまれず離脱できる、とされた。それを特に説いたのが、叙事詩『マハーバーラタ』のなかの「バガット・ギーター」である。しかし結果を思わずというだけでは心の持って行きように困る。そこで、ヴィシュヌ神あるいはシバ神のことを激しく思って行為することが勧められた。こうした神への激しい信仰（信愛バクティ）が推奨されることになった。

こうして世俗に迎合する宗教思想も世俗を否定しそこから離れていく宗教思想も、一般世界（世俗）を変えていく力にはならなかった。いまある世界（世俗）を否定しつつそれに激しく関わりそれを変えていくような宗教思想。そうした世界を支配する宗教思想としてヴェーバーがたどり着いたのが古代ユダヤの宗教、とりわけその預言者の思想だった。

都市の王や貴族によって抑圧され奴隷にされることに抵抗し都市から逃げ出したカナンの人びとは、同じようにエジプトの王の元から逃げてきたモーゼがもたらしたヤハウェという神を受け入れ、このヤハウェの名の下に立ち上がり、イスラエル人を名乗り、王侯貴族を打倒した。ところがみずからの国をつくとふただび王がうまれ人びとを搾取し隷属させようとする。王制を批判する人びとは、人びとを開放した戦争神ヤハウェを持ち出すことで王制を批判した。イスラエルがその両側にある大国によって滅ぼされると、民衆解放の神ヤハウェをないがしろにしたからであると預言者は訴えた。預言はさらに、ヤハウェはエジプト、アッシリア、新バビロニアの帝国をも操って、自らの神殿さえ壊して、イスラエル

(のちにユダヤ)の人びとを罰するのだと訴えた。その結果、ヤハウエ神は、世界を支配する神となり、バビロン捕囚後には、唯一絶対の神となったのでした。こうして、ただ1人の神を崇拜する一神教がうまれたのである。

ユダヤ人やアラビア人などのセム族には、神の言葉を預かる預言者の系譜があった。その系譜の最後に立ち、ユダヤ教・キリスト教の神観の元に新しい宗教をたちあげたのがマホメットであった。マホメットはユダヤ教・キリスト教の一神教を受け入れ、より簡単にしかしより力強いものとした。

ヴェーバーが、『古代ユダヤ教』を書いていた時、ドイツ帝国は第一次世界大戦のさなか、亡国の危機にあった。その時、あえて亡国の危機にあることを告げる預言者となろうとヴェーバー自身はしたのである。それはまさに「神なき時代の預言者」たらんとした英雄的で悲劇的な生き様だったのである。

文 献

- Max Weber (1921c) 『ヒンドゥー教と仏教—世界諸宗教の経済倫理〈2〉』 深沢宏訳, 東洋経済新報社 2002年
- Max Weber (1921d) 『古代ユダヤ教』 (上) (中) (下) (下) 内田芳明訳, 岩波出版, 2004年
- 雨宮慧 (2009) 『図解雑学旧約聖書』 ナツメ社
- 白川静 (1972) 『孔子伝』 中央公論社